

第19回ニューデリー国際ブックフェア

名称	19th New Delhi World Book Fair
会期	2010年1月30日(土)～2月7日(日)
開場時間	11:00～20:00
会場	Pragati Maidan, New Delhi
展示面積	42,000㎡
主催	NATIONAL BOOK TRUST, INDIA
出展社数	1,199(インド 1,164 海外 35)
参加国	15カ国 アメリカ合衆国、イスラエル、イラン、オーストリア、サウジアラビア、スリランカ、ドイツ、トルコ、日本、ネパール、パキスタン、バンラディッシュ、フランス、マレーシア、ロシア
国際機関	ILO, WHO, UNESCO, The World Bank
テーマ	スポーツ (Special Exhibit of Books on Sport) ネルー初代首相 (Collective Exhibit of Books on & by Nehru)
入場者数	20万人 (The Japan Foundation インド事務所推定)
入場料金	Rs20(約40円) ただし、制服着用の学生は無料。

報告：楠田 武治 [株]小学館 出版局 (兼) 社長室国際出版支援ルーム、(兼) ネット戦略室]

ニューデリー市内近況

2010年1月29日22時45分、タイのバンコク経由でデリー(インディラ・ガンジー)国際空港に到着。ただし、霧のため着陸後30分間滑走路脇に待機した。その後、入国審査を終え、税関を経て入国した。独立行政法人国際交流基金 The Japan Foundation のブックフェア担当の保科輝之氏が空港に迎えに来てくれることになっていたが、テロ警戒態勢強化のため空港内には入って来ることができなかった。携帯電話で保科氏と連絡を取り、出口を確認して空港外に出た。深夜にも関わらず、空港周辺は驚くほどの黒山の人だかり。タクシー、自家用車のクラクションがあちこちで鳴り響く。

首都ニューデリーの南部に位置する空港から The Japan Foundation 所有の自動車に乗り、市内の中心部へ向かった。2010年10月にニューデリーで開催される予定の英連邦スポーツ大会 Commonwealth Games 2010 (CWG2010) のために、市内のいたる所で、地下鉄工事、道路工事が続く。路上には自動車、二輪車、オートリキシャ(三輪タクシー)、歩行者が溢れる。その中を縫うようにして自動車は進む。市内の中心部コンノートプレイスにあるホテルに到着したの

は、日付が変わった1月30日。午前中からの仕事に備えて就寝した。

コンノートプレイス周辺は、ムガル帝国に対抗して大英帝国が設計、建設した英国風の街並みが続く。ホテル周辺の建物は、大英帝国時代の外観はそのままに、補修しながらいまだに使われている。市内の北部のムガル帝国が築いた首都に比べて、大英帝国が建設した新首都は道路の道幅も広く、街路も整備されている。ただし、その広い道路は、横断歩道ではない場所でも歩行者がいたる所で横断する。中央分離帯にも歩行者が歩いている。高速道路でも路上を歩行者が歩いていることに驚いた。近年、二輪車に加え、自動車の所有が増え、市内は慢性的な交通渋滞のため大気汚染が問題になっている。地下鉄の完成で交通渋滞の緩和が期待されている。午前10時、コンノートプレイスのホテルを出発。会場となる Pragati Maidan 国際展示場を目指す。この会場はインドモーターショーが開催されるなど大規模な施設。ホテルからは自動車でも15分くらいの便利な場所に位置する。

ブックフェア会場の概要

ニューデリー国際ブックフェアは、Pragati Maidan 国際展示場の敷地内にあるホールのうち、今回は13のHallと野外エリアを使用して開催された。42,000㎡の開催スペースに、2,400を超える展示社のブース(Stall)が設けられ、海外からは15か国が参加し、国際機関なども参加した。アジア・アフリカ地域では最大規模のWorld Book Fairである今回の展示内訳は以下の通りであった。



Hall No.1 & 2 英語書籍出版社、

Hall No.3, 4 & 5 英語書籍ディストリビューター、

Hall No.6 & the open area 科学・技術専門書籍出版社

Hall No.7A & B 国際展示

Hall No.7C & the Hanger 教育書籍専門出版社

Hall No.7F, G & 7B Foyer 社会科学・人文科学専門出版社

Hall No.7H 雑書&マルチメディア出版社

Hall No.12 インド言語書籍出版社

Hall No.12A ヒンディ語書籍出版社&ディストリビューター

Hall No.7E 児童向け展示館

Hall No.7E 青少年向け展示館

Hall No.7E スポーツ関連書籍の特別展示

Hall No.7A Foyer ネルー首相に関する書籍展示

正直に言えば、展示・運営は万全ではない。ブックフェア開幕後に徐々に進めていくというのがインド流運営。まだまだ改善の余地があるが、年々改善されていくのだろう。今回の1月30日の開幕日には、開催館の入り口にHallの看板表示がなく、どの建物がどのHallであるか見当もつかなかった。さすがに地元の新聞社からその混乱ぶりがケイオス(大混乱)と紙面で指摘されたためか、翌日の朝、会場に着くと、館の入り口に取り付けるHall No.の看板が突貫工事で付けられていた。New Delhi World Book Fairの英文ガイドブックも開幕数日後にやっと入手できた。ここは現在発展途中のインド、日本のようなきめ細かなホスピタリティを期待してはいけないと実感した。プレスルームでは毎日プレスリリースを発行していたが、同じ日付で発行していたりして校正がしっかりしていなかった。朝一番で日付の誤植を指摘したら、プレスルームのスタッフからは感謝された。

New Delhi World Book Fairの一番の特徴は、展示販売会の要素が大きいということ。市内の中心部を視察したが、街のそこら中に書店がある環境ではないニューデリー。首都でさえこのような書店環境であるから、インド国内で書籍を購入する機会はかなり限られている。だから、ブックフェアで書籍を購入する機会は、市民にとっても貴重なようだ。この会期中にまとめ買いする人が多い。むしろこの会期を逃しては、書籍購入の機会がないのではないかと、現地The Japan Foundationのスタッフも言っていた。

今回最も大きな展示スペースを占めたのは、英語書籍の展示スペース。New Delhi World Book Fairの主役はまさにここに集結していた。Hall No.1,2,3,4 & 5に、英語書籍の出版社、ディストリビューターが集中的に展示スペースを設けている。インドに現地法人を持つ欧米の出版社、例えばHarperCollins、Penguin Group、Hachette、Random House、Scholasticなどのブース(Stall)が集まり、まさに大型書店が展示場に出現という感じである。欧米でベストセラーになっている品ぞろえ。大きなスペースに、売れ筋の最新英語書籍が平積みになっており、多くの親子連れが本を選んでいった。学歴社会であるため、知識層の教育にかける熱意はすごい。英語書籍、英語の児童書、英語の教育関係の書籍を食い入るように見ていた。また、何冊もその場で購入する光景も目にした。

インドはスポーツの歴史を誇る国であり、2010年英連邦スポーツ大会(CWG2010)の開催国の重要なホスト役を務める。Hall No.7Eでは、特別展示「Reading Our Common Wealth」と銘打って、スポーツ関連の書籍展示やさまざまなスポーツ関連アクティビティ、スポーツ選手を招いてのイベントなどが企画されていた。伝説的なスポーツヒーローたちがBook Fairに招待された。例えばVishal Sareen氏(チェス)、Milkha Singh氏(陸上競技)、Zafar Iqbal氏(グラウンドホッケー)などが、アクティビティに参加して来訪者を集めていた。英連邦スポーツ大会(CWG2010)を、なんとしても成功させたいインド政府の熱意が、スポーツをテーマにした展示を企画した理由であると思われる。

また、Hall No.7A Foyerには、主催者のNATIONAL BOOK TRUST, INDIA(NBT)の設立に尽力し、インド国民に読書の機会を与えてきたと称される、初代首相ネルーに関する本が集められた。ネルーの書籍はインド国内だけに限らず、海外からの貴重な書籍も集められていた。

日本ブース (Stall)、および国際展示 (Hall No.7A)

Hall No.7A には、日本の国際交流基金 (The Japan Foundation) と出版文化国際交流会 (Publishers Association For Cultural Exchange) の共同プロジェクトとして出展された。日本ブース (Stall) は、Hall 7A Stall No.18。Hall 7A には海外からの出版社が集められていた。日本の展示は、(1) 英文版図書 110 冊 (文学 16、日本語教材 5、社会科学 11、芸術 9、伝統 39、写真 3、児童 8、マンガ 19)。(2) 和文児童 22 冊。(3) コミック 32 冊。(4) *Japanese Book News* No.60-62 掲載図書 59 冊。(5) ファッション・その他 53 冊。(6) 国際交流基金関連図書 9 冊。合計 285 冊の、日本の出版社の書籍を展示した。また、ブース (Stall) の入り口には、大型プラズマディスプレイパネル (PDP) で、日本の街並み、自然、生活など、美しい映像が収録された NHK 制作による DVD をブース (Stall) の前で見せ、来訪者に日本の魅力をアピールした。また、ブース (Stall) では、インド人のアルバイト大学生が、日本の折り紙を作って展示もした。日本語専攻の男子大学生 Tara さんと、国際ビジネス専攻の女子大学生 Ritika さんが、ブース (Stall) に常勤。来訪者に合わせて、ヒンディ語、英語、時には日本語で対応した。The Japan Foundation の出展ということもあり、訪問者の中には本とは関係なく、日本に関することや、電子デバイスに関する質問をする人もいたが、できるかぎり応対・説明した。



この Book Fair が展示販売主流であるため、日本ブース (Stall) の来訪者の多くが、展示書籍の購入を希望した。展示書籍は会期が終わった後、The Japan Foundation のインド事務所の図書館に所蔵される。来訪者には図書館の利用を勧めたが、どうしても購入したいという方が多かった。ある富裕層家庭の子女中学生が日本ブース (Stall) を訪れ、私は幼少期から日本語を勉強しています。日本語エッセーの書き方の本はありませんか？ と丁寧に日本語で尋ねてきた。また、図書館ではなく、ぜひいま購入したいとのこと。あいにくエッセーの書き方の本は展示書籍ではなく、彼女のリクエストに応えることはできなかった。

The Japan Foundation が企画制作し、インドの出版社 Goyal が出版する日本語学習教材 SAKURA、UME など展示していたが、来訪者の日本語学習書に関する興味は高かった。

日本ブース (Stall) の来訪者にアンケートを求めたところ、その中で 169 名が答えてくれた。以下にアンケート結果を報告する。

Q1. 日本ブース (Stall) に来訪した理由は？

ビジネスのため	36 名
日本の書籍に興味があるから	66 名
日本の文化に興味があるから	78 名
日本語に興味があるから	25 名

たまたま通りかかったから 28名

Q2. 日本ブース (Stall) の印象について教えてください。

(1) 展示書籍の数は？

大変充実している 36名 充実している 96名

あまり充実していない 19名 充実していない 18名

(2) 展示レイアウトは？

大変見やすい 44名 見やすい 104名

あまり見やすすくない 8名 見やすすくない 0名

(3) アテンダントの対応は？

大変満足 66名 満足 76名

やや不満 0名 不満 0名

(4) 総合評価

大変満足 46名 満足 90名

やや不満 6名 不満 0名

Q3. どのジャンルの書籍に興味を持っていますか？

フィクション 38名 芸術 73名 文化 82名

政治・外交 14名 地理・旅行 39名 社会 33名

経済 21名 環境 28名 歴史 26名 哲学・宗教 30名

マンガ・アニメ 28名 その他 23名

回答者

性別 男性 122名 女性 47名

年齢 10-19 13名

20-29 57名

30-39 39名

40-49 30名

50-59 18名

60~ 12名

職業 出版業 23名

図書館関係 5名

教育関係 30名

研究者 23名

学生 15名

その他 73名

海外からの出展で、最も存在感が大きかったのはなんといってもドイツ。フランクフルト・ブックフェアが出展するドイツのブース (Stall) は、Stall No. 36-52 で、最も大きな規模 (スペース) で注目を集めていた。日本ブース (Stall) の隣、Stall No. 17 はロシアの MK-PERIODICA JSC、その隣の Stall No.16 フランス政府、そして Stall No.15 イスラエル・ヘブライ語文学翻訳協会が並ぶ一角に設営された。また、はす向かいのアメリカンセンターのブース (Stall) は Stall No. 29-34 で、日本の近隣ブース (Stall) では比較的大きなスペースを誇っていた。

日本ブース (Stall) にとって、書籍販売という視点で注目すべきは Stall No.16 のフランス政府のブース (Stall) であった。フランス政府は、展示のみの書籍と、販売可能な書籍の両方を展示していた。今回ブックフェアのために来印したフランス作家の書籍を販売することで、来訪者も満足していたようだ。日本ブース (Stall) はすべての書籍が展示のみだが、来訪者から購入の希望を伝えられるケースが多かった。日本ブース (Stall) は現在は展示のみであるが、フランス政府のように一部の書籍を販売してみてもよいのではないかと思った。The Japan Foundation の保科輝之氏も、日本ブース (Stall) での書籍の販売の可能性を探るとおっしゃっていたので、次回 2012 年開催予定の 20th New Delhi World Book Fair では日本の出版社の一部の書籍が来訪者に販売されるかもしれない。インド人来訪者のために PACE でも書籍の一部販売をご検討いただければ幸いである。

開会式

開会式 (Inauguration of 19th World Book Fair) は、開催初日 1 月 30 日の 15:00 からの予定であったので、10 分前に会場 Hamsadhwani Theatre に到着した。保科副所長からは、インドで 15:00 から始まるという表示は、15:00 より前には始まりません、もっとゆっくりしても大丈夫と言われたが、開幕の瞬間を撮影できないと大変だと思い、早めに会場へ向かった。招待状にはカバン、携帯電話の持ち込みは禁止と書かれていたが、入場に際して招待状の確認など、セキュリティチェックはまったくなかった。多くの入場者が携帯電話やカバンを持ち込み、また撮影していた。インドのおおらかな文化のためか、15:00 定刻からは開会式は始まらず、やはり約 15 分遅れで開会した。



開会式の壇上には National Book Trust, India の会長である Bipan Chandra 教授と、Nuzhat Hassan ディレクター、そして 3 人のゲストスピーカーが並んだ。Shri Kapil Sibal 人材資源開発省大臣 (Minister of Human Resource Development)、Temsula Ao 教授 (North-Eastern Hill University 人文科学・教育学部長)、Irfan Habib 名誉教授 (Aligarh Muslim University) が、ゲ

ストスピーチした。

前回（隔年開催）2008年のブックフェアでは、当時の人材資源開発省大臣が急遽欠席したようだが、今回は Shri Kapil Sibal 大臣がしっかりと出席して、World Book Fair 開催の意義を語った。マスメディアも開会式に集まったが、彼らのメインの取材対象は Shri Kapil Sibal 大臣であった。大臣のスピーチが終わると、ほかのスピーカーが発言中もおかまいなしで、大臣が移動するとマスメディアが大臣を追う。メディアが去っていく、移動の騒がしさのなか、大学教授が授業のような冗長なスピーチを続けていた。一方、マスメディアが注目する人物だけあって、Shri Kapil Sibal 大臣のスピーチは、大学教授のスピーチとは大きく異なり、スピーチの英語に抑揚があり、聴衆にしっかりと訴えていた。

Shri Kapil Sibal 大臣のスピーチは National Book Trust, India (NBT) への賛辞から始まった。本の文化を振興し、インドに知識豊かな社会を造り上げることを目的に、初代首相ネルーは NBT を設立した。それ以来、過去 52 年間、NBT は絶えることなく、さまざまな本関連の活動を通じて、ネルー首相が掲げた目的を達成する責任、そしてコミットメントをもって邁進されてきた。インドが国家として発展を遂げるためには、読書が欠かせない。人類の文明と本とは相互に補完し合うものであるとのこと。

Shri Kapil Sibal 大臣は、彼が少年だったころ、受験勉強や学校で学ぶテキストブックではなく、テキストブックを超えて、知識を得てきた実体験から、学校のテキストブック以外に、もっと本を読むことの重要性を説いた。知識とはコミュニケーションである。子どもたちが本を読む習慣を身につけ、知識を自分のものとする必要がある。本には、ものすごくたくさんの知識が詰まっていることを理解しなくてはならないと訴えた。本を読む習慣を子どもたちにもたせることは、国家の発展に、国民の読書が不可欠であり、そうした活動を続けていくことの意義を訴えた。インドの大学教育に関しては、科学・技術教育が盛んであり、大学とえば、エンジニア大学、医学大学、科学大学を思い浮かべてしまいがちであるが、真に必要であるのは、世界最高レベルの一般教養課程をもつ大学が必要ではないか。言語学、文化、経済開発、哲学、心理学など、文系学問をただ愛するだけではなく、革新的な改革、イノベーションが大学にこそ必要であるとのこと。また、Irfan Habib 名誉教授（Aligarh Muslim University）のスピーチの要点を言えば、文明とはどんな本を作り、読まれたか、ということで判断される、ということだった。今回のブックフェア開催はインド文明に貢献するものだと訴えた。急速な経済発展を続ける国家インドにおいて、科学・技術だけではなく、人文科学などさまざまな分野で、読書による知識向上を目指すインド政府の意志が、New Delhi World Book Fair 開催につながっていることを実感した。

インド市場の読み方

The Japan Foundation インド事務所の遠藤 直所長、ブックフェア担当の保科輝之副所長とは、インドにおける日本の存在や経済について意見交換をおこなった。有名な観光地訪問のオファーもいただいたが、丁重に辞退した。その代わりにニューデリー市内の書店取材、ショッピングセ

ンター取材に案内いただいた。

首都ニューデリーの市街地には、東京のような数の書店は見られない。東京であればいたるところに書店があるが、ニューデリーでは雑誌スタンドなどはあるが、書店はなかなか見つけることができなかった。

まず、完成すれば世界最大のショッピングモールとなるといわれるニューデリー中心部の Select City Walk という巨大ショッピングモールを訪問した。このショッピング



モールは高級ホテルも含む広大な敷地内にあり、現地の富裕層が訪れる。メルセデス・ベンツのEクラス、ホンダのCR-Vやアコードなどの新車に乗ったインド人が駐車場にやってくる。ショッピングモールの中には、世界レベルのブランド店が入っていた。六本木ヒルズなどに入っている欧米のブランド店や、SONYなどの日本製大型テレビなどを扱う Audio-visual(AV) ショップもこのショッピングモールには出店している。ここには、英語書籍、雑誌、DVD、文房具などを扱う書店 CROSSROAD がテナントとして出店していた。CROSSROAD は、原則的に店内撮影・取材は禁止なのだが、Sanjeevan Pwiari 店長のご厚意で取材させていただいた。英文の書籍は、欧米のベストセラーが平積みになされ、DVD ではマイケル・ジャクソンの『THIS IS IT』など、日米欧でヒットしているタイトルが置かれていた。村上春樹さんの小説(英文)もちゃんと置かれていた。私が編集者として何冊か出版させていただいたことのある大前研一さんの著作(アメリカの出版社、英文の書籍)も売れているとのことだった。店長からは、日本でいま売れ筋の著者の作品を紹介してほしいとも言われたので、いくつかの最新ヒット作をお伝えした。店長の目利きでたくさんの最新書籍がそろえられていた。本はジャンル別に整理整頓されており、東京で言えば青山ブックセンター六本木店のような感じ。テニス選手のアンドレ・アガシの最新自伝『OPEN』などもそろえられており、インドにいるのを忘れてしまうような書店であった。

この書店がはいっている Select City Wall から一步敷地の外に出ると、インドのケイオス社会が広がっていた。路上に暮らす人たち、けたたましいクラクションの音、自動車、オートリキシャ、二輪車、歩行者が入り交じった道路を走ると、Select City Wall がインドの一般社会から乖離した、一部の富裕層向けの施設であることを実感する。さて、市街地の一般書店はどうだろうか？ 保科副所長の住居の近くにある、比較的外国人も訪れる頻度の高いカーンマーケットと呼ばれる市場に向かった。カーンマーケットにある喫茶店を併設する書店は、英文書籍を中心に置く小綺麗な中規模書店だった。CROSSROAD のような大型店舗ではない。この書店の顧客は、市場にやって来るのは近隣の住民、外国の旅行者だという。英語を日常的に使用するエリート・インド人、外国からの旅行者、外国人の駐在員が顧客のようだ。

さらにカーンマーケットで、さらに小規模な個人経営の書店を訪問した。店内に入ってみると本が整理整頓されておらず、本が乱雑に置かれていて、どうやって本を探せばいいのか？ と戸惑ってしまうような店だったが、インド人の顧客で溢(あふ)れていた。Amazon などのオンラ

イン書店もまだ普及しておらず、街の書店の品ぞろえにも限界がある。市場の書店で普段から書籍の購入機会の少ないインドの人々にとって、World Book Fair 会場での購買機会がとても貴重なものであることが理解できた。

市内の書店取材の後、The Japan Foundation を表敬訪問し、遠藤 直所長と保科輝之副所長と、インドの市場の話をした。ニューデリーでは 2008 年から、日本の乳酸菌飲料ヤクルト（50Rs = 約 100 円）が製造・販売されていると。ヤクルトの販売員『ヤクルトレディ』による宅配と店舗流通で販売している。確かに、宿泊先のホテルでも朝食のビュッフェでヤクルトを選ぶことができた。ヤクルトの販売員になると制服とスクーターが貸与される。The Japan Foundation の遠藤 直所長によれば、一定数の販売数をクリアすればスクーターを貰えるとあって、この仕事は人気になっているとのことだった。女性の仕事を創出するという意味でもヤクルト販売員の仕事は、インド政府にも好感をもって受け入れられているようだ。

また、自動車産業をみれば、日本のスズキは、現地合弁会社であるマルチ・スズキが、庶民に手の届く低価格で性能のいい自動車を生産し人気を博している。近年は欧州、日本などの中級車、高級車も入ってきている。最近では、現地のタタ財閥が約 20 万円の超低価格自動車 1 ラックカーを発売するなど、新たなモータリゼーションの波がインドにやってくると感じた。二輪車に関しては、ホンダと現地企業の合弁企業ヒーロー・ホンダ、そしてホンダが、二輪車市場の約 65% を占め、二輪車では一番の人気を博している。

私は現在、ノンフィクション作家・中部博氏とともにホンダの取材を続けている (http://blog.bookpeople.jp/atlas/hiroshi_nakabe/)。その取材の中で、ホンダの二輪生産台数がかつても多いのがインドだと知った。ホンダの年間二輪生産台数が日本国内約 18 万台に対して、インドの年間生産台数は約 600 万台という、驚くべき規模の市場だということ。このエマージング市場のダイナミズムを取材すべく、首都ニューデリー南西部の隣接都市 Gurgaon まで足を伸ばした。ニューデリー市内が日中はトラックの走行が禁止されていることもあり、Gurgaon 市には外国企業の拠点が置かれている。フランスの大手出版社 Hachette も市内に支社を構える。インド取材最終日の 2 月 2 日、The Japan Foundation からはニューデリー市内の歴史的建造物の視察もオファーされた。歴史的な遺跡の施設訪問にも興味はあったが、私はホンダ二輪工場を視察することを意思決定した。歴史的な遺跡を観光するよりも、ホンダへの訪問が私にとっては現代のインドを知るために貴重な機会であった。

Gurgaon 市内にあるホンダの二輪生産のための現地法人 HMSI (Honda Motorcycle & Scooter India Pvt. Ltd) を訪問すると、青山真二社長 (President-CEO) と浜松正之アドバイザー (Advisor - Sales & Marketing) が暖かく迎え入れてくれた。二輪車を生産するホンダの現地法人社長・青山氏からは多くのことをご教授いただいた。ホンダでは、New Delhi World Book Fair の取材だけではわからない、インドの市場の実態についてよく学べた。

インド連邦共和国は、世界第 2 位の人口 11 億 7000 万人の大国。マハラジャの時代から藩主が統治していた地域の連邦国家で、公認言語 - 18 種の言語、公用語 - ヒンディ語、補助公用語 - 英語など、言語は多種多様。世界で 7 番目の国土面積を誇り、日本の面積の約 9 倍。インド同時テロ、隣国パキスタンとの緊張関係など不安要因はあるものの、第二次シン政権は安定している。昨年末には日本の鳩山首相が訪印するなど、日本との外交関係も良好だ。長期経済成長見通しも、

安定的成長の見通しである。インドの好景気を支えている、最も大きな要因は公務員給与引き上げと、農村からの穀物買い取り価格の引き上げだ。さらに、2009年12月には労働者階級の賃金20%UPなど、国民の所得向上により購買力が急速に上がっている。

ホンダの青山真二社長によれば、インドを一言で語るのは困難。『インドとは大河のようなものだ』という。大河の上層はものすごいスピードで流れているが、中層、下層はゆったりと流れている。大河の上層にたとえられる人たち、全人口のわずか数%の人々が世界最先端の製品やサービス、品物を求める。上層の顧客がもし5%であっても、総人口11億7000万人であればその顧客を無視するにはあまりにも大きな人数、ホンダは8種類のバイク、スクーターを投入しているが、富裕層にも庶民にも満足いただけるように、商品展開を行っている。そうしたマーケティングを行えるのも、彼らが25年以上前にインド市場に進出しているから。出版社がインド市場に進出するには、インドの市場を調査してからにすべきだと思う。ただし、綿密に調査することは実際には難しいと思われる。とても複雑な社会であり、複雑なマーケットであるが、欧米からの期待は大きい。

11億7000万人の巨大市場、インドの将来性に賭けて、ファッション雑誌、ライフスタイル雑誌、ニュース雑誌、自動車雑誌などなど、ほとんどの欧米の雑誌社は、インド版雑誌を発刊している。潜在的市場といえども、広告料金は日米欧の料金に比べても遜色ない設定のようだ。

例えば、英国のクオリティーが高い自動車&二輪車の雑誌*AUTOCAR* Indiaは、1999年にインドの英語雑誌市場に参入。発行部数は13万部。輪読など考えても60万人がターゲットといわれる。11億7000万人を誇るインド市場で最も評価されている自動車&二輪車の雑誌ですら、わずか13万部の発行部数なのである。しかも価格はRs60(約120円)。13万部発行で、しかも英国のオリジナル記事に加え、インド独自の記事も掲載される記事づくりで雑誌の内容は充実



しているにも関わらず、販売価格は120円。出版社の経営者にとって、入広がたっぷりなければこの価格でビジネスにするにはとても難しいと思う。欧米の一流雑誌(英語)がインド版として低価格で市販されている。例えば、英国BBCの人気自動車番組の雑誌*Top Gear India*はRs100(約200円)。世界の旅行誌*Lonely Planet Magazine India*はRs100(約200円)。女性ファッション誌もほとんど欧米と同じように発行されている。例えば、*VOGUE India* Rs100(約200円)、*ELLE India* Rs 100(約200円)など、束が厚いファッション雑誌が売られている。また新聞も、英字新聞も空港やホテルに無料で置かれているところがある。新聞の広告料金が日欧米の料金に匹敵する料金設定のために可能となったビジネスモデルであると思われる。

インドの市場は、出版社にとっても魅力的な市場規模ではある。潜在的には大きな市場である。しかし、出版物の販売価格を考えると、インドでの出版ビジネスは大変難しいと言わざるをえない。欧米の出版社にしても同じ悩みを抱えているが、英語を日常的に使用しているインド人、つまり11億7000万人の人口のうち約4%だと推測される人々に向けて、英語書籍を積極的に販

売している。わずか4%といっても、11億7000万人の人口のうち約4%といえば約4,680万人。このインドの富裕層、知識層の市場に向けて、広告料金も先進国並の料金に設定して英文雑誌も発売している。インドの富裕層、知識層が読むのは、英語の雑誌、英語の書籍であるため、英米の出版社にはアドバンテージがある。現在はまだ4%程度かもしれないが、今後、日常的に英語を使用する人々が増加すると予測され、ますます英語の雑誌、書籍の市場は伸びていくにちがいない。そこで、欧米の大手出版社は現地法人を持ち、本格的に進出を始めている。今後のインドの経済の発展と、欧米大手出版社の動向をうかがいながら、日本の出版界もインド市場への進出戦略を練らねばならないと実感した。

最後に

TVや新聞、インターネットで見聞きした二次情報ではなく、現場からのレポートが、多くの出版人の皆様にとって、少しでもお役に立てれば幸いである。

以上のNew Delhi World Book Fairのリポートに加え、VIDEO撮影も行った。動画のダイジェスト版DVDを作成し、出版文化国際交流会(Publishers Association For Cultural Exchange)事務局にお届けした。もし、動画でインドの事情をご覧になりたい方は、出版文化国際交流会の事務局まで問い合わせさせていただきたい。

出版物は国境を越えて、世界の人々に届くもの。出版の世界はボーダレスワールドではなからうか？ また、本を通じて世界が理解を深め合うことが、世界の平和や発展につながるのではないかと思う。これからも、独立行政法人国際交流基金と出版文化国際交流会(PACE)が協力して、国際ブックフェアの現場からの報告等、日本の出版と世界の出版の国際交流活動を続けていかれることを祈念する。今回、インドまで派遣していただいた国際交流基金と出版文化国際交流会(PACE)の皆様から心から感謝を申し上げる。

インド事情に精通するホンダ(HMSI)の青山真二社長、浜松正之アドバイザーへの取材、ブックフェア会場の取材、インドの書店取材などで、おぼろげながら見えてきたインドの出版事情である。ニューデリーのブックフェア取材、書店取材は、編集者としてなかなか体験できない貴重な機会であった。また、インドの地で、ホンダの青山真二社長、浜松正之アドバイザー両氏にお会いできたこと、二輪工場見学も、何よりも得難いことであった。また、現地に駐在されている独立行政法人国際交流基金The Japan Foundationの遠藤直所長、保科輝之氏からも、インド市場に関する貴重な情報をうかがった。最後にこの場を借りて、インドでお世話になった青山真二氏、浜松正之氏、遠藤直氏、保科輝之氏に、心から感謝を申し上げる。